特集　観光による地域振興

エコツーリズムを通じた地域活性化
― マレーシア、ランカウイ島の取り組み ―

西村　公一（にしむら　こういち）
株式会社 未来政策研究所　研究員

真板　昭夫（まいた　あきお）
NPO法人 日本エコツーリズム協会　理事

1．はじめに

近年、観光産業の成長促進が日本の重要政策となっている。2006年には観光立国推進基本法が成立、2010年に閣議決定された新成長戦略では、「観光立国・地域活性化」が戦略分野の一つとして掲げられた。そして、2013年には訪日外国人旅行者が1000万人を超え、日本政府は、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年に「訪日外国人2000万人を目指す」としている。

観光産業が今後の成長分野として注目されるのは、経済波及効果があり、外需を取り込むことができるからだ。観光庁によれば、観光の生産誘発係数（１単位の最終需要によって生産がどれだけ誘発されるかを示した係数）は、公共事業投資、科学技術関連投資、情報化投資と同じレベルであるとされる[1)]。また、海外からの観光客を呼び込むことによる外需取り込みは、今後人口が減少し内需の縮小が懸念される日本においては重要な意味を持つ。更に、日本は南北に長く異なった気候帯と自然環境に恵まれているため、各地域の自然は特徴的となり、また、その自然との関わりの中から生まれる人々の営み、文化、歴史も多様なものとなる。このような個性溢れる自然、歴史、文化は、人々を惹き付ける観光資源となり得るものであることから、日本の各地域は観光を軸とした地域活性化につながり得る優れた観光資源を有していると言える。人口減少や内需縮小への対策、地域活性化などの課題を抱える日本において、観光はそれらの課題を解決する手段の一つとして大きなポテンシャルを持っているのである。

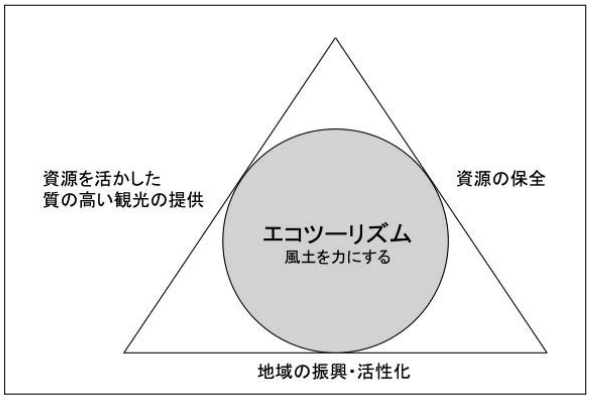
2．注目を集めるエコツーリズム

観光の中でも21世紀型観光の主役として先進国・発展途上国を問わず大きな注目を集めているのがエコツーリズムである。マスツーリズムに代表される従来型の観光は、環境や地域社会に対する配慮が希薄であったために多くの弊害が生じていた。そこで、それらに代わる新たな観光の形が望まれ、その中で生まれてきたのがエコツーリズムである。

エコツーリズムの捉え方は国や地域によって様々であり、多様な定義が存在するが、自然や歴史、文化など地域の様々な資源を保全しつつ活用しながら地域を発展させていくことが基本的な考え方としてある。NPO法人日本エコツーリズム協会は、エコツーリズムに多様な定義があることを認めた上で次のように定義している。

エコツーリズムとは、
①自然・歴史・文化など地域固有の資源を活かした観光を成立させること
②観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切な管理に基づく保護・保全をはかること
③地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現すること
をねらいとする、資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の融合を目指す観光の考え方である[2, 3)]。

1）出所：国土交通省・観光庁　観光統計コラム「知って得する観光統計：第６回　観光が成長戦略の有望分野であるわけ」http://www.mlit.go.jp/common/000225647.pdf
2）出所：NPO法人日本エコツーリズム協会ホームページ　http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what/
3）次ページ左図出所：真板昭夫、比田井和子、高梨洋一郎著　『宝探しから持続可能な地域づくりへ　日本型エコツーリズムとは何か』　学芸出版社　2010年10月　p.13



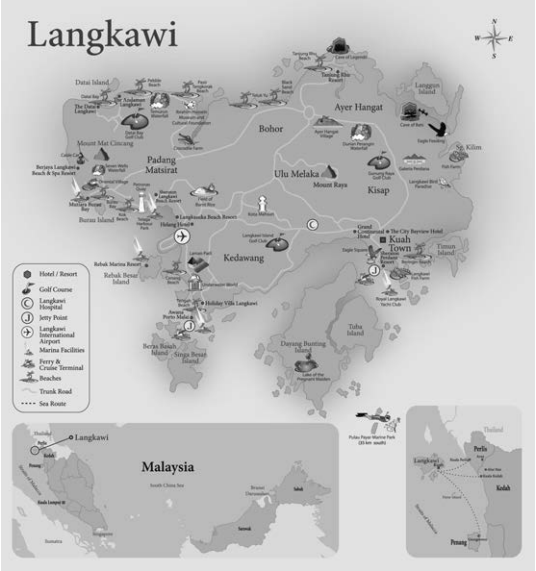
図：エコツーリズムとは

日本では、2007年に「エコツーリズム推進法」が成立し、翌2008年から施行された。一方、世界に目を向けると、これより以前にエコツーリズムの実践に取り組み、既に産業として確立している先進事例がある。その一つがマレーシアのランカウイ島である。

３．エコツーリズムの先進地であるランカウイ島

ランカウイ島は、マレーシア北西部のアンダマン海にある島である[4)]。タイとの国境にある島で、以前は農業・漁業を中心とした小さな貧しい島であったが、約25年前から観光開発が始まり、1987年に自由貿易地区に指定され「免税の島」となった。そして、1997年からエコツーリズムが開始された。その後、2007年には国連教育科学文化機関（UNESCO）によりジオパークに認定された[5)]。同島を訪れる観光客は2013年に340万人に達し、2014年には400万人を目指している。

ランカウイ島は貴重な自然の宝庫である。５億５千万年前のカンブリア紀の地層、東南アジアで最古と言われる熱帯雨林、マングローブの森や湖等が存在し、ワシ、コウモリ、カニクイザル、サイチョウ等の野生動物が生息する。



ランカウイ島MAP

更に文化的な魅力も見逃せない。マレーシアは元々多民族・多宗教国家であるが、ランカウイ島はその縮図であり、多様なバックグラウンドを持つ人々が生活している。昔ながらの伝統的な生活様式を保ちつつ、ゆったりとした時間が流れる魅力溢れる島である。

この豊かな自然や文化を保護しながらも活かしつつ、地域振興を図る手段としてエコツーリズムが実践されてきた。

本年５月、「日本・マレーシア　エコツーリズム交流視察プロジェクト[6)]」により、この魅力溢れる島を訪れ、エコツアーを体験し、現地の関係者と交流する機会が得られた。以下では、その体験の一端をご紹介したい。

4）右地図出所：マレーシア政府観光局ホームページhttp://www.tourismmalaysia.or.jp/region/lan/images/map_langkawi.pdf

5）ジオパーク：科学的に見て特別に重要で貴重な、あるいは美しい地質遺産を複数含む一種の自然公園。ジオパークでは、その地質遺産を保全し、地球科学の普及に利用し、さらに地質遺産を観光の対象とするジオツーリズムを通じて地域社会の活性化を目指す。2004年には世界ジオパークネットワークがユネスコの支援により設立され、現在では50箇所のジオパークが参加基準を満たすジオパークとしてネットワークに参加している。（出所：日本地質学会ホームページ http://www.geosociety.jp/geopark/geopark.htm）

6）同プロジェクトには、NPO法人日本エコツーリズム協会、鳥取県、及び、エコツーリズムの関係者が参加した。５月12-18日の７日間にわたり主にランカウイ島へのツアーを行い、エコツーリズムの取り組み視察と現地関係者との意見交換が行われた。同プロジェクトは、2013年10月に鳥取県で開催された「エコツーリズム国際大会2013in鳥取」にマレーシアから招聘されたアンソニー・ウォン氏（アジア・オーバーランド・サービス代表）の提案をきっかけに実現した。

４．ランカウイ島でのエコツアー体験と日本・マレーシア エコツーリズム交流会議

ランカウイ島で体験できるエコツアーには様々なものがあるが、今回は主に次の５つを体験した。また、日本とマレーシアのエコツーリズム関係者が交流する会議に出席した。

①マチンチャン・カンブリアン・ジオフォレストパークでの熱帯雨林トレッキング

同ジオパークはマチンチャン山を中心とした一帯にあり、カンブリア紀に形成された岩から成る。東南アジアで最も古い山並みを形成し、そこに生い茂る熱帯雨林も東南アジアで最古と言われる。ケーブルカーで山頂に上り、下りはネイチャーガイドの説明を受けながら熱帯雨林のトレッキングを行った。太古の姿を留めた貴重な植物、葉っぱの裏側で昼寝をするコウモリの姿などが見られた。

ケーブルカーでマチンチャン山の山頂へ

ネイチャーガイドの説明を受けながら熱帯雨林をトレッキング

②キリム・カルスト・ジオフォレストパークでの水上ツアー

マングローブの森が広がる川をボートで移動し、ネイチャーガイドの説明を受けながら、そこに生息する動植物の生態について観察した。空にはランカウイ島の象徴であるワシが舞い、陸地にはカニクイザルの親子の姿が見えた。洞窟の中に入ると、暗闇に佇むコウモリの群れに遭遇した。

マングローブの森

ネイチャーガイドの説明を受けながら
マングローブが茂る川を移動

カニクイザルの姿も

③バード・ウオッチング

ランカウイ島には約220種の野鳥が生息する。湿地や小高い山を移動し、ネイチャーガイドの説明を受けながら、野鳥や植物の生態について学んだ。運が良ければサイチョウ（サイの角のような突起物を持つためそのように呼ばれる）などにも出会える。珍しい鳥を見つけるべく夢中で双眼鏡を覗いた。

ネイチャーガイドの説明を受けながらバード・ウオッチング

珍しい鳥を見つけるべく夢中で双眼鏡を覗く参加者

湖の近くではアカショウビンの姿も

④ホームステイプログラム

自然のみならず文化もランカウイ島の貴重な観光資源となっている。マレーシア政府は地域住民の日々の生活、営み、文化を体験することができるホームステイの推進に力を入れており、認証制度も設けている。ランカウイ島にも政府の認証を受けた民家が集まる集落があり、その一つを訪問した。地域住民の方が伝統料理や踊りを披露してくれた。

ホームステイ受け入れ先として政府の認証を受けた民家が集まる集落

政府の認証を受けた家が掲示するロゴマーク

地域住民による伝統料理づくりの実演

⑤環境配慮型ホテル（グリーンホテル）の取り組みを学ぶエコウォーク

今回宿泊したホテル「フランジパニ・ランカウイ・リゾート」はグリーンホテルと呼ばれる環境配慮型のホテルである。ホテル内で、汚水浄化、雨水利用、廃油や残飯の利用、水やエネルギーの効率利用、スタッフへの環境教育などに力を入れている。また、宿泊者向けのエコウォークプログラム（ホテル内の環境保護の取り組みをスタッフの説明を受けながら見て回る）や植物のオーナー制度を設け、宿泊者が環境保護について学び、取り組める機会をつくっている。環境への配慮がビジネスに有効であり、環境と経済が両立することが示されていた。

グリーンホテルでのエコウォークプログラム

ホテル内で料理に使う野菜も栽培

植物のオーナー制度での植樹

⑥日本・マレーシア　エコツーリズム交流会議

上記のエコツアーに加え、日本及びマレーシアのエコツーリズム関係者が参加し意見交換を行う交流会議が開催された[7]。交流会議では、「ランカウイの観光業の変遷」、「ランカウイにおけるエコツーリズムの取り組みと課題」、「鳥取県におけるエコツーリズムとジオパークの推進」について講演が行われ、その後、エコツーリズムが抱える課題についてパネルディスカッションが行われた。

NPO法人日本エコツーリズム協会会長・愛知和男氏による挨拶

交流会議の様子

パネルディスカッションの様子

5．日本への示唆：地域の生き残り策の一手段としてエコツーリズムが活用できる可能性

日本の地域は人口減少、少子・高齢化、財政不足など多くの問題を抱えている。先般発表されたいわゆる増田レポートでは、消滅の可能性がある自治体も指摘された。そのような中、各地域は、今後どのように生き抜いていくべきかを考える必要に迫られている。そして、その手段の一つとしてエコツーリズムの活用が考えられる。

ランカウイ島は、四半世紀前までは貧しい農漁村であったが、その後の観光開発により、2013年には340万人の観光客が同島を訪れる世界でも有数の観光地となった。ランカウイ島の観光開発に伴う旅行者数の増加は、同島のGDPや雇用の増加につながり、当時３万人足らずであった人口は、2010年には15.5万人に達した[8]。そして、今後ランカウイ島を、世界トップ10に入る島の観光目的地にしていく取り組みが現在進められている。

このような発展の勢いは今回交流した現地関係者からも強く感じられた。特に、現場の最前線でエコツーリズムの実践に取り組むネイチャーガイドの方が、地域の自然、動物、歴史、文化などを訪問者に丁寧かつ面白く伝え、生き生きと活動する姿に地域活性化の原動力を垣間見ることができた。

既述のように日本では、2007年に「エコツーリズム推進法」が成立し、翌2008年から施行されている。そのため日本では各地域がエコツーリズムに取り組むための制度的基盤が既に確立されているのである。

日本の多くの地域は一見「ないない尽くし」のように見えるが、実は各地域には個性溢れる自然や文化の資源が数多く眠っている。それを地域住民自らが再発見し、価値化し、観光資源として活用し、交流人口の増加や物産の販売などを通じて地域振興につなげ、何より地域住民が誇りを持って生き生きと生活できるようにするためのきっかけにエコツーリズムはなり得る。今回のランカウイ島訪問はその可能性を一段と強く感じさせるものであった。

7）日本からは、NPO法人日本エコツーリズム協会、鳥取県、米子市、大山町などの関係者総勢70名が、マレーシア側からは、マレーシア政府観光局、ランカウイ開発庁、地元ネイチャーガイドなどが参加した。
8）出所：ランカウイ開発庁ホームページ　http://www.naturallylangkawi.my/EN/People_And_Culture